ショパン　　チェロ・ソナタ　ト短調　Op.65

ショパン（1810～1849）がピアノ以外に興味を示した唯一の楽器がチェロだったのは、親友がチェリストであることにその理由があったようだ。

ショパンが 1831 年 9 月パリに初めて着いてから、生涯を通じて親友となった名チェリスト,フランショーム（1808～84）は出版業者との交渉に関してはショパンの代理人の役割をつとめたり、ショパンの数少ない公開演奏会をするに当たってはパートナーとして組んだり、彼に捧げられたこのチェロ・ソナタの初演を 1848 年 2 月 16 日のショパン最後の演奏会で共演した。そして、1848 年 10 月死の床についたショパンは彼を脇に呼んでモーツァルトを弾いてくれるよう頼んだ。

二人の深い友情が数少ないチェロ音楽に一つの宝を加えることとなった。

ショパンの最後の大作となったこのチェロ・ソナタはジョルジュ・サンドとの 10 年続いた愛の破局の兆しと健康が衰えていく 1846 年頃（36 歳）に作られた。環境の不調とは裏腹に作曲への意欲が旺盛でこの年は多くの作品を残した。曲の内容はエネルギッシュで雄大、起伏に富む一方、第 3 楽章は天国的な美しさを湛え、ショパンが作った最も美しい旋律の一つに数えられる。ピアノのパートはショパンならではの華麗な書法で書かれており、チェロのパートもフランショームの助言の功があってか、技巧的にも申し分なく効果を発揮している。ピアノとチェロが対位法的に複雑に絡み合い、大作曲家としてのショパンの創作の集大成のみならず、19 世紀の最も独創的なチェロの作品の一つとなった。

ショパン最後の演奏会プログラム　1848 年 2 月 16 日（38 歳）　パリ

１．　モーツアルト：　ピアノ・トリオ　ホ長調　Ｋ５４２

２．　ノクターン　Ｎｏ．８　Op.27-2

３．　舟歌　Op.60

４．　<u>チェロ・ソナタ　第２，３，４楽章</u>

５．　エチュード　Op.25-1、25-2、25-7

６．　子守歌　Op.57

７．　プレリュード　Op.28-8、28-10、28-11，28-12、28-17

８．　マズルカ　Op.7-1，7-2

９．　ワルツ　Ｎｏ．１　「華麗なる大円舞曲」

１０．ワルツ　Ｎｏ．６　Op.64-1 「子犬のワルツ」